

聖書：コリント人への手紙第二 11：1～15

説教題：清純な処女として

日時：2025年3月2日（朝拝）

パウロは今日の 11 章 1 節を「私の少しばかりの愚かさを我慢してほしいと思います」と始めます。これは一体何のことでしょうか。こう述べて彼が実際にこの話をするのは次回見る 16 節以降です。16～18 節：「もう一度言いますが、だれも私を愚かだと思わないでください。もし愚かだと思えば、愚か者として受け入れてください。そうすれば、私も少しばかり誇ることができます。これから話すことは、主によって話すのではなく、愚か者として、自慢できると確信して話します。多くの人が肉によって誇っているのだから、私も誇ることにします。」つまり自分がこれからする誇る話を我慢してほしいと言っているわけです。彼は直前の 10 章 17 節で「誇る者は主を誇れ」と言いました。自分自身を推薦するのはナンセンスで愚かだと言っていました。なのになぜ自分を誇る話をここで始めるのでしょうか。それは簡単に言えば偽教師たちの影響を受けて正しい道から外れて行きそうなコリント人たちを引き戻すためです。コリント教会はパウロの後にやって来た偽使徒・偽教師たちによってかき乱されています。偽教師たちは自分たちがパウロよりどんなに優れた人間であることを示し、それによってコリント教会のある人たちは動かされつつありました。このままではパウロが捨てられるだけでなく、パウロが伝えた福音までもが捨てられてしまいます。そしてコリント教会を設立したパウロの働きも水の泡になってしまいかねません。そこでパウロは「愚かなことですが」と断りつつも、偽教師たちと同じ土俵に上り、自らを誇るのです。そしてその話において、彼らのように誇ることが愚かであること、そして真に誇るべきことは何かについて語って行くのです。その話を始めるにあたって、これからの愚か者の話を我慢してほしいと言っているわけです。

1 節後半は命令形としても読むことが可能です。聖書協会共同訳はここを「いや、我慢してほしい」と訳しています。この場合、パウロの強い思いを表していることとなります。新改訳のように訳す場合は、すでに我慢しているように、なお忍耐をもって聞いてほしいという意味になるかと思います。

続く 2 節でパウロはどんな思いでこの話をしようとしているのか、その心の内を証ししています。「神の熱心」という言葉が出て来ますが、これは妬むという意味の言葉

で強い愛を表す言葉です。その妬むほどの神の愛と同じ愛の心を私も持っていると言います。そして「清純な処女として、一人の夫キリストに献げるために」あなたがたを婚約させたとパウロは語ります。ここで「婚約」と聞いて、ある人は戸惑うかもしれません。教会はキリストの花嫁ではなかったのか。つまりキリストと教会はすでに結婚関係にあるのではなかったのかと。しかしそうではないということがこの箇所から分かります。今はまだ婚約状態にあるというのが正解です。

ユダヤでは婚約も法的な関係に入ることであり、その時点で夫あるいは妻と呼ばれました。イエス様の誕生の記事を思い起こせば分かります。婚約中のヨセフが夫のヨセフと言われていました。婚約した者は約一年間の期間を経て、ついに一つ屋根の下に住む結婚生活へと入ります。そんな婚約中の人が他の異性に身をささげることは姦淫の罪を犯すことです。そのことがまさにここで心配されています。

当時は父が娘の結婚において大きな責任を果たしました。結婚の日まで娘を処女として保ち守ることは父親の義務でした。パウロはコリント人たちにとって霊的な父に当たります。パウロの宣教を通してコリント人たちは信者になったからです。ですからパウロが彼らをキリストへの信仰へ導き、キリストに婚約させました。では結婚はいつなのでしょう。それはキリストの再臨の日です。ヨハネの黙示録 19 章 6～9 節にはキリストの再臨の日を指して「子羊の婚礼の時が来て、花嫁は用意ができた」と言われています。その再臨の日こそキリストと教会の結婚式の日であり、祝宴が正式に始まる日です。今はそのために準備をする婚約の期間です。やがての日に私たちはエペソ書 5 章 27 節にあるように「しみや、しわや、そのようなものが何一つない、聖なるもの、傷のないものとなった栄光の教会」としてキリストの前に立たせていただきます。ですからその日まで純潔を保たなければなりません。キリストにのみ真心をささげる歩みを保たなければなりません。

しかしそこから引き離そうとする動きのあることが 3 節に語られます。すなわちサタンです。「蛇が悪巧みによってエバを欺いたように」とあるのは、ご存知の通り創世記 3 章の墮落の出来事を指しています。それと同じようにコリント人たちの思いが汚されてキリストに対する真心と純潔から離れてしまうのではないかとパウロは心配しています。偽教師たちによってです。

その彼らのしていたことが4節にあります。それはパウロたちが伝えたのとは違う別のイエスを宣べ伝えたり、あるいは異なる霊、異なる福音を伝えていたことです。「あなたがたはよく我慢しています」とありますが、これはどういうニュアンスでしょうか。1節で「我慢してほしい」と語られましたが、それは我慢して受け入れて聞いてほしいという意味でした。つまりコリント人たちはあからさまな抵抗をせずに偽教師たちの教えを受け入れてしまっていたということです。次回見る20節にも「実際あなたがたは、だれかに奴隷にされても、食い尽くされても、強奪されても、いばられても、顔をたたかれても、我慢しています」とあります。ですから非常に危ない状態にすでにあったのです。パウロはそこから彼らを救い出すために急いで対処しようとしています。

果たして偽教師たちが伝えていた別のイエス、異なる霊、異なる福音とはどのようなものだったのでしょうか。パウロははっきりとその内容について語っていないため、正確には分からないところもありますが、この手紙全体を考慮するなら、その輪郭は描けると思います。まず別のイエスとはどんなイエスでしょうか。これまで見て来たことから言えることは彼らは一言で言えば勝利主義に立っていたということです。その反対に苦しみや弱さを軽蔑していました。つまり彼らは私たちのために十字架に付けられたキリストを尊び、その足跡に倣うようにということは言わない。ただ自分たちに栄光や勝利、繁栄や地位向上をもたらしてくれる都合の良いイエス、つまり別のイエスを宣べ伝えていたのです。また異なる霊とは何でしょうか。この「霊」は通常「御霊」を指す言葉です。つまり彼らは霊の働き、聖霊の働きを強調していました。特にその力の現れや、奇跡的な体験、恍惚状態になること、あるいは様々な不思議なしるしを強調していました。そのような上からの霊による特別な力やしるしがパウロにはないと言って批判していました。パウロはそれについては後から述べます。彼は自分がそのような特別な霊の体験をしても、それを自分から話して誇ることはしませんでした。しかし偽教師たちはこの点で自分たちは優れていると言って誇り、互いに競い合い、争っていました。聖霊は謙遜な霊であり、共同体に一致と平和をもたらす方なのに、彼らは霊を強調して逆に分裂と争いを引き起こしていました。つまりそれは異なる霊、聖霊とは違う霊と言わざるを得ません。そして異なる福音とあります。これは先に見たイエス様と聖霊について異なることを述べる彼らのメッセージをまとめた表現と見ることができます。あるいは後に12章10～11節を見ると、コリント教会には「争い、ねたみ、憤り、党派心、悪口、陰口、高ぶり、混乱」があり、また

「汚れと淫らな行いと好色を悔い改めない多くの人たち」がいたことが記されていますが、そんな彼らを良しとし、その悪徳を容認・助長する教えが説かれていたのかもしれないかもしれません。

5 節以降でパウロは偽教師たちとの対決に先立ち、彼らが行っていたいくつかの批判に対して答えています。まず彼らはパウロのことを「話し方は素人だ」と言っていたことが6 節から伺えます。それとは対照的に、偽教師たちはある点から見れば、その話しぶりは雄弁だったのでしょう。だから自分たちはパウロにはるかに勝る使徒であり、つまり大使徒であると誇っていた。これは彼らの尊大な主張に基づく、パウロの皮肉を込めた表現だったのかもしれない。しかしパウロは彼らに自分たちは少しも劣っていないと言います。話し方は素人でも、知識においてはそうでない。この知識とは神と福音に関する知識、あるいは神のご計画全体に関する知識のことでしょう。偽教師たちは自分たちの話し方は洗練されていると誇っていましたが、パウロは大事なものは中身であり、真理であると言っています。パウロが真の知識を神から受け、伝えて来たことは、これまでの宣教の言葉にも、またこの手紙における言葉にも証しされて来ました。

また7 節以降では報酬を受け取らなかったことについて語られています。パウロはコリント教会からは報酬を受けませんでした。先の第一の手紙9 章、特にその14 節に記された通り、福音を宣べ伝える者が、その働きから生活の支えを得ることは主が聖書で定めておられることです。しかしパウロはつまづく人がいるなら、それを受け取りませんでした。彼はコリント人を高めるために、すなわち彼らの益のために率先して自らを低くしたのです。そのために8 節に「他の諸教会から奪い取って、あなたがたに仕えるための給料を得た」と記されています。「奪い取って」とは激しい言葉ですが、それほど犠牲的なサポートがあったことを暗示します。実際にささげてくれたのは9 節にある通り、マケドニアの教会でした。マケドニアの教会の一つであるピリピ教会に宛てた手紙の4 章15～16 節にはこうあります。「ピリピの人たち。あなたがたも知っているとおりに、福音を伝え始めたころ、私がマケドニアを出たときに、物をやり取りして私の働きに関わってくれた教会はあなたがただけで、ほかにはありませんでした。テサロニケにいたときでさえ、あなたがたは私の必要のために、一度ならず二度までも物を送ってくれました。」パウロは今後もあなたがたの重荷にならないようにする、すなわちあなたがたから報酬を受け取らないと言います。このためにパ

ウロはコリント教会を愛していないという批判もなされたようです。パウロはコリント教会と深い関係を築きたくないのだ！と。パウロはそのことは神をご存知ですと言います。言うまでもなく、彼らを愛しているからこそ、このような犠牲的奉仕も進んでささげているパウロです。

また 12 節に今後も報酬を受け取るつもりがないのは偽教師たちが求めている機会を断ち切るためだともあります。彼らは正当なレベルを超えて貪っていたことが、先ほども参照した 20 節から伺えます。そんな彼らにとってパウロが報酬を受けないままだと分が悪くなります。自分たちの強欲さが浮き彫りになります。ですからパウロにも報酬を受け取ってもらいたいという心があったようです。パウロはそんな彼らに都合よく利用されないためにもコリント教会からは報酬を受け取らない方針を貫くと言っています。

最後の 13～15 節でパウロは偽教師たちを直接的に非難します。13 節で彼は「こういう者たちは偽使徒、人を欺く働き人であり、キリストの使徒に変装しているのです」と言います。14 節では「しかし、驚くには及びません。サタンでさえ光の御使いに変装します」と言います。神は光なるお方です。ですから光の御使いとは神に仕える天使のことです。一方、サタンは暗闇の支配者であり、光とは反対の存在です。なのにサタンは神に仕える天使のふりをして人間に近づくのです。そしてだますのです。「ですから、サタンのしもべどもが義のしもべに変装したとしても、大したことはありません」と言います。パウロはここではっきりと偽使徒たち・偽教師たちをサタンのしもべどもと言います。別のイエスを宣伝伝えて真のイエスから引き離すなら、確かにそうなのです。そのような者たちは最後にはふさわしくさばかれるとパウロは断言します。

今日の箇所から私たちは婚約中の者たちであることを改めて覚えさせられます。キリストとの結婚式はこれからです。その日を見据えて純潔の歩みが求められています。清純な処女としての歩みが求められています。またそんな私たちに対して私たちの思いを汚し、キリストに対する真心と純潔から引き離そうとするサタンの働きがあることも覚えさせられます。それはもちろん今日も行われています。それは一見分かりにくいものです。サタンは光の御使いに変装し、そのしもべどもも義のしもべに変装して近づいて来るからです。ですからよく見分けなければなりません。今日見て来た偽

教師たちの教えの特徴も今日見られるのではないのでしょうか。その特徴の一つは勝利主義です。イエス様を信じることによる祝福、成功、繁栄について述べるばかりで、十字架に付けられたキリストに倣う歩みを軽蔑し、毛嫌いし、これをあまり言わないということはないのでしょうか。あるいは霊的な体験とか奇跡とか特別なしるしについてばかり熱心に語り、それをもって自分はさも霊的な人間であるかのように主張し、他者と比べ合い、教会に分裂と争いを引き起こしているということはないのでしょうか。あるいは悪の生活からの悔い改めを求めず、そのまま問題ないかのように言い、かえって罪の生活を許容し、容認し、助長する福音が説かれていることはないのでしょうか。

パウロは自らがキリストによって立てられ、遣わされた使徒であることを示し、自らが伝えた福音に生きるようにとコリント人たちを導いて行きます。私たちも同じです。パウロが真の使徒であることを、この後の彼の言葉を通してさらに確信させられ、彼に託された真の福音・使徒的福音・新約聖書の教えにこそとどまるべきです。この聖書に記されている言葉に良く照らしてすべてを見分けて行くべきです。引き続きパウロの言葉に聞いて、真のイエス、真の聖霊、真の福音にとどまる者たちでありたいと思います。そして清純な処女として自らを整えて、ついにかの日にキリストの前に傷のないものとして立たせていただき、結婚の祝福へと入る主の花嫁なる教会の歩みへ導かれて行きたいと思います。